

前号を書き終えて、岩崎さんのお話がまだまだたくさん残っておりましてので書かせて頂きました。

『三陸海岸に設けられた大要塞を思わせる防波堤を三陸大津波は苦も無く乗り越え、押し倒し、押し返して行ったエネルギーは現代の想像を超えるもの凄いものでした。

あの日海が割れ、大地が毀れた時、私は空が毀れるのを見ました。

今まで見た事の無いオレンジ色となり、やがてピンク色に変わり空が毀れて行きました。

三陸海岸は切り立った崖と崖とに挟まれる様に出来た小さな川、沢、入江、湾に漁村集落が肩を寄せ合う様に軒を連ねております。津波には最も危険な地形集落であります。

縄文以来、災害から生き残った先人たちの教えは津波が来たらすぐ裏山へ逃げろ！とあります様に三陸は海辺まで崖山が迫っておりますので高台へ逃げるチャンスを誤らなければ生き残れる可能性も持って居ります。

三陸にはこの地より下は住むな！と言う石碑がいくつか建っております。住民も漁師たちも皆わかっておりますが、三陸の海は極めて豊かでありますから、何百年に一度の大津波を恐れながらも海に近い所に集落が出来ていましたので、今度の津波では一村、集落、丸ごと浚われて跡形もなくなっております。

宝来館へ避難した人々は津波が収まるとすぐに大工さん達は流木を集めて、小屋や施設を作り、薪を集めて24時間燃やし続けてくれました。焚火は人の心を暖め、勇気づけてくれました。灯りは漂着した漁船から発電機を見つけ、流れ着いた冷蔵庫の電球を使って照明してくれました。食べ物には漂着物の中から泥だらけのお米を見つけて炊きましたが炊きあがった御飯は真っ黒なものでした。

私達は口癖のようにじいちゃん、ばあちゃんから「津波が来たらすぐ山へ逃げろ」と教えられ、日常もそのための訓練を致して参りましたから、釜石は犠牲者が少なくて済みました。しかし観光客の多い休祭日にこの様な大震災が起きたら、観光客をどう誘導して避難させ、その収容先は？食糧はどうするか？私達の今後の大きな課題であります。非常食の一部は常に車へ積んで置く用意も必要であります。また防波堤は巨大で頑丈なものを作ればよい！と言う考えは私には持って居りません。私達が安全な高台へ住むにしても、釜石の海、浜辺は全国から来られる人達との交流の場として残しておきたおからであります。

根浜海岸は今年も海水浴の方達でいっぱいです。

観光とは文化の交流であり、現代人が最も大切にするコミュニケーションの場であります。

災害地を観光する目的にはなさらないで下さい。またいつか日本のどこかに必ず大災害はやってきます。私達の悲劇を次の教育、訓練に生かしていただきたい。自分の命は自分で守る意識をもっと強く持つことを伝えて下さい。』と岩崎昭子さんは訴えて居りました。